

追 悼



御 略 歴

生年月日 大正4年4月8日

出身地 栃木県足利市

現住所 横浜市南区庚台61

昭和15年3月 東京帝国大学医学部卒業

昭和25年4月 横浜医科大学整形外科助教授

昭和28年6月 日本整形外科学会評議員

昭和29年11月 福島県立医科大学整形外科教授

昭和35年10月—56年3月 横浜市立大学整形外科
教授

昭和40年12月 理学療法士作業療法士国家試験委員

昭和46年5月—47年5月 日本リハビリテーション
医学会会長

昭和48年4月 神奈川県総合リハビリテーション事
業団理事

昭和48年12月 医療関係者審議会理学療法士作業療
法士部会委員

昭和50年7月 日本リハビリテーション医学会理事

昭和50年11月—51年11月 日本パラプレジア医学
会会長

昭和51年10月 神奈川県総合リハビリテーション事
業団研究部長

昭和55年4月—56年4月 日本整形外科学会会長

昭和56年11月—57年11月 日本義肢装具研究会会
長

昭和57年3月 日本整形外科学会名誉会員

昭和57年4月—58年3月 神奈川リハビリテーショ
ン病院院長

昭和61年6月 日本リハビリテーション医学会名誉
会員

昭和62年4月—平成2年6月 横浜市総合リハビリ
テーションセンター
長

昭和62年11月 勲3等旭日中綬章叙勲

平成2年7月 横浜市総合リハビリテーション事業団
顧問

平成4年8月4日 御逝去 享年77歳

故 土屋弘吉先生を偲ぶ

北里大学医学部
横山 巖

土屋弘吉先生は平成4年8月4日、心筋梗塞のために卒然としてこの世を去られた。先生は整形外科医としても高名であるが、わが国のリハビリテーション医学を育成発展させた功労者として不朽の名を留められた。いつもわれわれ後輩を励ましお導き戴いたあの慈愛に満ちた温顔にもうお目にかかれないうと思うと、大きな悲しみに胸を塞がれてしまう。

先生のお名前に初めて接したのは、昭和38年に私がニューヨーク大学リハビリテーション科に留学していた時だった。卒業後15年を経て言葉の不自由な異国でのレジデント生活に幾許かの悩みや不満を持っていた私は、当時横浜市大整形外科教授であった先生が5年前に福島県立医大教授であったにもかかわらず、ここで同じ生活を送られたことを知って驚き、叱咤激励された思いがし、肅然として背すじを正す思いをした。

昭和41年神奈川県老人福祉事業団七沢病院の開設に当たって、先生は掌中の珠ともいふべき大川嗣雄先生を派遣して下さい、院長として私は心から有難く感じた。大川先生は土屋先生が育てられた優れたリハビリテーション医であり、後に多くのリハビリテーション医を養成された俊秀であるが、横浜市大にリハビリテーション科が生まれてその科長となるまでの数年間を七沢病院のためにご努力いただいた。大川先生の後には1年交替で数名の整形外科医を次々と派遣して下さいしたが、いずれも優れた人柄の方々ばかりで、土屋先生の素晴らしいお人柄がお弟子さん方に見事に反映されていると感心したものである。

昭和47年に先生は横浜で、リハビリテーション医学会総会を会長として主催されたが、先生のご苦心の成果が実って、この学術集会はリハビリテーション医学会として極めて内容の充実した素晴らしいものとなった。この年に先生は、本誌「総合リハビリテーション」の発刊に当たって編集委員長となられ、当時の若手であった私共を上手くまとめて率いていかれ、56年に勇退されるまでの間に今日の発展の基礎を築かれた。毎月の編集会議が和気藹々として大変雰囲気良かったのは先生の人徳のお陰であった。

昭和48年に神奈川県総合リハビリテーション事業団が発足すると共に、先生は理事になられ、この巨大な施設がリハビリテーションの在るべき姿に向かって発展するように腐心された。この事業団の中の1病院の院長として理事であった私には、リハビリテーションの道を踏み外してはならないとする先生のお気持ちが有難く、とくに身に沁みて感じられた。横浜市大の名誉教授になられた後、57年から1年間この事業団の神奈川リハビリテーション病院の院長を勤められたが、先生が素人の域を超えた油絵をお描きになることを知ったのはこの時のことであり、その素晴らしいご趣味に深く感動させられた。

昭和62年には先生が多年に亘ってその計画を指導されてきた横浜市総合リハビリテーションセンターが開設され、先生は初代のセンター長になられた。優秀な人材を揃えられて、このセンターは忽ちわが国の優れたリハビリテーションセンターの一つとなった。平成2年6月にセンター長を勇退されて顧問となられ、11月には勲三等旭日中綬章を叙勲されたが、その祝賀会で美しい奥様と二人で壇上に立たれて、慈愛に満ちた温顔に笑みを湛えて力強く謝辞を述べられた先生のお姿が忘れられない。大変お元気であったのに、先生はこの度、卒然として逝ってしまわれた。そして先生が育てられたリハビリテーション医学界の若き指導者大川嗣雄先生もまた、土屋先生に僅か4、5時間遅れて同じ病院であの世に旅立たれた。何という奇しき因縁であろうか。三途の川を師弟一緒に渡られたかと思うと胸が熱くなってくるのを禁じえない。ご冥福を心からお祈り申し上げます。